

2019年(令和元年)12月20日

病院長からの一言 ONE TEAM (ワンチーム)

弘前大学医学部
附属病院長 福田 眞作



日本で初めて開催されたラグビーワールドカップは、台風による豪雨災害があるなど複雑な状況下での開催でしたが、日本中に興奮と感動をもたらしました。2019年の「新語流行語大賞」の年間大賞に「ONE TEAM」が選ばれ、受賞者はラグビー日本代表チームです。多国籍な選手で構成された日本代表を率いるジェイミー・ジョセフHCが、「出身地、文化など背景が違って目標に向かって一致団結し、その違いを乗り越えて一つになる、結束したチーム」を目指して掲げたテーマです。半分近

くが外国人という多様性のあるメンバー編成にもかかわらず、彼らは強い信頼関係を築くことで、日本中を感動させ、予想を大きく上回る結果を残すことができたのです。長期の合宿を通して、お互いの価値を認め合うこと(相互理解)で信頼関係が生まれたと、とある選手が語っていました。病院という組織も同じではないでしょうか。国籍はほぼ全員が日本人ですが、医師、看護師をはじめとする医療職、病院経営や施設設備を支える事務職員、様々な外注業者から派遣されている職員、

非常に多種多様な職種の皆さんが、「患者さん中心の医療の提供」、「安定した病院経営」という共通の目標を掲げて集結した組織が私たちの病院です。構成員が1,000名以上をかかえる大きな組織だからこそ、私たちの目標を達成するためには、職員間の相互理解や信頼関係の高い組織「ONE TEAM」を目指すべきだろうと思います。

そのためにどうするか。職場での仕事上の事務的な会話だけではお互いの人間性まで計り知ることはできません。日々の仕事以外の何気ない会話(雑談)が、お互いの個性を知り信頼関係を構築するうえで有効と言われます。残念ながら院内にそのような機会は多くはありません。本院が直面する今後の様々な課題に対応していくためにも、皆さんが確かな信頼関係で結ばれた「ONE TEAM」になれるよう、日々多忙な毎日ではありますが、機会をみつけて色々な方々と特に他職種の皆さんと「雑談」をしてみてください。病院長もいつでもお待ちしております。

各診療科等の紹介

【泌尿器科】



弘前大学医学部泌尿器科学講座は昭和37年(1962年)に開設されました。初代の舟生富寿教授から平成元年(1989年)に2代目鈴木唯司教授へと引き継がれ、平成16年(2004年)8月から大山力が教室の主任を担当しております。開講以来、教室ではグラスファイバー膀胱鏡および尿管鏡の開発、副腎ステロイドホルモン代謝、カテコールアミン代謝、回腸新膀胱の開発、血液透析、急性腎不全、移植免疫、尿路上皮癌に対するBCG療法など、時代の先端を行く研究成果を発信してきました。3代目の大山はこれに加えて、糖鎖生物学、分子生物学の手法を取り入れ、日常診療での様々な疑問や改善点を基礎研究で解決すべく、基礎と臨床のバランスの取れた研究を展開しています。

現在、泌尿器科学講座のほか、先進移植再生医学講座、先進血液浄化療法学講座という2つの寄附講座も併設され、基礎研究を専門に行う3名のPhDスタッフが自身の研究はもちろん、医師の研究も強力にサポートしています。

さて、近年の低侵襲手術の進歩は目覚しく、泌尿器科領域でも従来の開腹手術からミニマム創手術、腹腔鏡手術、そしてロボット手術と急速な進歩を遂げています。当科では、ロボット手術をいち早く取り入れ、2011年からロボット前立腺全摘除術、2012年からロボット腎部分切除術とロボット膀

胱全摘除術を開始し、1,000件を超える国内有数の成績を上げています。特にRARCと回腸新膀胱は保険収載において主導的役割を果たし、他施設からの見学者を多数受け入れています。腎移植は、2005年に新たに立ち上げた「診療科の枠組みを超えた腎移植ユニット：チーム弘大」が実績を積み上げ、生体腎移植と献腎移植を合わせた移植数は2017年に100件を超え、5年生着率97%と良好な成績を上げています。

また、糖鎖生物学を中心とした基礎研究の優れた業績も多く、前立腺癌や膀胱癌のバイオマーカー、腎移植後の抗体関連拒絶予測バイオマーカーなど実臨床に役立つ研究も展開しています。米国San Diego郊外のLa JollaにあるSanford Burnham Prebys研究所と20年以上にわたって共同研究を継続しており、常時2名の留学生を派遣しています。同研究所で研究する医師は同時にUC San Diegoの泌尿器科で臨床のトレーニングを積むことができ、海外でも基礎と臨床の充実した研修が体験できます。このような活動が成果を上げ、昨年8月には古家琢也准教授が岐阜大学の教授として着任しました。これからも「地域を支え、世界に躍進する弘大泌尿器科」をモットーに精進していきたいと思います。

(泌尿器科科長 大山 力)

新病棟の整備を開始

平成26年からの準備期間を経て、新病棟の建設を含む病院全体の再開発整備計画を本格的にスタートさせました。

附属病院の第一病棟は平成元年の完成から30年が経過し、建物及び附帯設備の老朽化が進んでいること、また、取り巻く医療提供体制の変化に伴い職員の増などによる狭隘化も進行しており、さまざまな社会的要請や療養環境に対する患者さんのニーズとも重なり、大学病院として求められる機能・役割を果たすための十分なスペースを確保できないことが課題となっておりました。このため、かねてから病棟の再整備について文部科学省とも協議しながら検討を重ねて参りましたが、このほど整備計画がまとまり新病棟建設に着手することとなりました。

新病棟には現在の第一病棟の機能を含め、超高齢化社会を控え多



病棟新棟の概要：地上9階、地下2階、延床面積18,240㎡

様な重症患者に対応しうる環境を整え、患者さんからの要望が強かった個室の増や患者アメニティの向上、更に大学病院として必要不可欠な教育・研修機能の充実を図ることとしています。

新病棟の建設予定地は現在の外来診療棟西側に新築する計画としており、令和2年1月に着工、令和4年度に完成する予定としております。

工事期間が長期となり騒音等に

より、ご迷惑をおかけしますがご協力のほどよろしくお願いいたします。

また、臨床講義棟の取り壊しにより、臨床研究棟と第一病棟及び第二病棟との連絡通路が少なく皆様にはご不便をおかけしますが、併せてご協力のほどお願いいたします。

皆様には新病棟の完成を楽しみにお待ちいただけますと幸いです。(病院再開室)

先憂後楽

ハザードマップを知っていますか？



呼吸器外科科長 心臓血管外科科長
福田 幾夫

土淵川などが氾濫し下土手町商店街も含む全壊・流失221戸、半壊156戸、床上床下浸水13,593戸の被害があったと記載されています。「落ちないリンゴ」の1991年のリンゴ台風の際は、53.9m/sの強風と停電のため津軽地方の病院の運営が大変だったとの口演を、救急医学会で伺った記憶があります。

以前に内閣府の研究費をいただ

いて災害時の病院避難についてシンポジウムを開催しました。常総豪雨水害で病院の1階部分が水没し、全患者を自衛隊のボートで避難させた病院の先生からも話を伺いましたが、「病院のすぐ裏手にあるちっぽけな用水路が溢れて数時間のうちに周りが湖になった。後でハザードマップを見たら病院は水害の高危険地域に建てられていたことがわかった」とのことでした。昨年、日本病院会の2,500病院を対象に行ったアンケート調査で病院周辺のハザードマップの認知度について伺ったところ、病院防災関係者の7割が病院付近のハザードマップを見たことがないとのお答えでした(朝日新聞2018年10月24日)。弘前市のホームページでは、大学病院周辺の水害ハザードは低いですが、岩木川の周辺は高い危険性を示しています。寺沢川は護岸工事と水路調整により水害ハザードが低くなっているようですが、最近では数時間で1,000mmのとんでもない雨が降

ることもあり、大学病院の裏手に川が流れていることを忘れてはいけません。少なくとも皆さんの自宅付近のハザードリスクだけは確認してみたいかがでしょうか？その上で普段から災害時の備蓄、避難手順も考えておきましょう。電気も脆弱です。2年前の北海道胆振東部地震で北海道全域が停電したこと、台風15号による強風のため千葉県南部で復旧まで長い時間がかかったことを忘れてはいけません。思い出してみましょ、東日本大震災の時に、停電のため暖房が効かずに本当に寒かったですね、マンションでは水を運び上げるのが大変でしたね。「自分だけは大丈夫」と思うのは、「正常化のバイアス」というそうです。ポイスカウトでは「備えよ、常に(Be prepared)」と教えています。過去の災害を「水に流して」忘れてしまうのは私たちの悪い癖です。ちなみに退職後に引越す私の自宅には、プロパンガスによる自家発電装置を入れました。



令和元年度本町地区総合防災訓練を実施

10月11日に本町地区総合防災訓練を実施しました。本訓練は、教職員の災害対策に関する知識・経験・技術の体得と向上、災害時に地域の核となるべく本院の災害医療体制の検証及び災害対策マニュアルの見直しを目的としています。

当日は、平日19時頃に弘前市内で最大震度6弱を記録する地震が発生し、本院建物の損壊はないものの、停電のため非常用発電機

が稼働し、エレベーターは点検完了まで使用不可であるという状況のもと、市内の多数傷病者を受け入れるという想定で、訓練が実施されました。訓練では、災害対策室の立ち上げ、職員の参集、院内各施設の被災状況の把握、トリアージ等を実施し、医師、看護師、医療技術職員、事務職員及び学生等、参加者が200人を超える大規模な訓練となりました。

参加職員からは、「患者に手術をするか、入院になるか等を決めるところで想定しての訓練はリアルだった」「停電等で電子カルテが使えない場合の対応を実際に経験・検証でき、非常に良かった」

「短時間であらゆる情報や要請が次々と入り対応者は大変だったが非常に良い訓練になった」等の前向きな意見がある一方、「紙のオーダー表の様式をより使いやすく変えた方が良い」「配置場所以外の役割がわかりづらい」「災害時の情報整理の方法について別途研修を行ってはどうか」等の意見もあり、今後の課題も確認でき、教職員の防災意識の醸成及び災害時の行動の再確認が図られ、有意義な訓練となりました。

今後、これらの意見を基に、更に実用的な災害対策体制を構築していきたいと考えています。

(総務課)

第21回 家庭でできる看護ケア教室を開催

10月16日、看護部主催による「第21回家庭でできる看護ケア教室」を開催し、12人の市民が参加されました。

今年は、「脳イキイキ、糖尿病と認知症予防にいいこと始めるなら今からでしょ!」をテーマに、「笑顔でポジティブに健康寿命を延ばす生活習慣のちょっとしたコツ」について糖尿病看護認定看護師と認知症看護認定看護師が講義し、体験コーナーでは参加者と交流を持ちました。

講義では、生活習慣(食べ物・運動・睡眠・知的活動)が脳の健康と糖尿病に関連しているため、生活

習慣を整えることは認知症や糖尿病の発症の抑制や進行予防に効果的であることを伝えました。知的活動の一つである音楽の効果を活用した音楽レクリエーション(唱歌・故郷(ふるさと)を歌いながらの手遊び)で場が和んだところで、自身の生活習慣チェックをしてもらいながら生活習慣見直しのコツを糖尿病看護と認知症看護の視点で説明しました。

体験コーナーでは、手軽にできるストレッチ、運動と知的活動を組み合わせたコグニサイズ(笑顔で足踏みしながらのしりとりなど)、リラクゼーション効果のあ



る「タクティールケア」を皆さん笑顔で楽しんで体験されていました。また、日頃疑問に思っている健康に関する質問が多数寄せられました。

参加者の更なる健康の向上はもちろんですが、周囲の方への健康意識向上の伝播を期待し、今後も市民の健康維持・増進に微力ながら貢献できればと考えています。

(糖尿病看護認定看護師 桜庭咲子)

日本専門医機構認定共通特定臨床研究講習会を開催



10月28日に弘前大学医学部基礎第1講義室にて、日本専門医機構認定共通特定臨床研究講習会を開催しました。参加者は全体で41名、医師が30名、事務職が10名、臨床工学技士が1名でした。演題1として、認定臨床研究審査委員会(CRB)委員長/循環器腎臓内科学講座教授富田泰史先生より、特定臨床研究の概要、特にその対象範囲についてご講演いただきました。演題2・3として、私の方から、CRBへの審査申請から研究終了までの流れ、及び、利益相

反管理について説明させていただきました。「臨床研究法」が平成30年4月7日に成立し、本学においても、同年8月22日に厚生労働省より認定されたCRBが設置されました。これまでに本学CRBにおいて承認された特定臨床研究は、新規申請研究が4件、掛け替え申請研究が14件です。法的な規制を課すことで、研究者の負担が増えることは否めませんが、研究対象者をはじめとする国民の臨床研究に対する信頼を確保するためには、本法を確実に遵守することが重要となります。本講習会を通じて、参加された皆様方に、特定臨床研究について理解を深めていただけたら大変嬉しく思います。最後に、今回の講習会開催に

あたりご協力いただきました、弘前大学大学院医学研究科 総務グループ、弘前大学医学部附属病院 医療情報部及び臨床試験管理センターの皆様方に厚く御礼申し上げます。

(臨床試験管理センター長 新岡文典)

メディカルスタッフ教育研修センターの設置

令和元年10月1日、本院にメディカルスタッフ教育研修センター(Medical Staff Education and Training Center: MS-ETC)が設置されました。本センターは、看護部、医療技術部、薬剤部の教育体制や研修プログラム等を統括し、医療人の専門性、国際性の向上、および、臨床現場への定着、

復帰支援に係る教育・研修体制を充実させることを目的としています。これらの任務を遂行するため、我々は、1)国際教育担当、2)プログラム担当、3)総合事業担当の3つの部門に分かれ活動していきます。1)国際教育担当部門は、メディカルスタッフの国際性向上に向けた国際化研修会や海外プログラムへの派遣、外国人患者に対応するための多言語ツール導入等に関する事業を実施します。2)プログラム担当部門は各部署で作成・管理している研修プログラムの整備や、新たな専門資格取得に向けたプログラム作成支援等の事業を実施します。3)総合事業担当部門は、メディカルスタッフの教育、スキルアップ、職場復帰支援等に資する院内研修会や医療系シミュレーションの企画・立案等の事業を実施します。

多職種が連携して良質なチーム

医療を実践していくためには、全病院職員を対象とした多種多様な継続的な教育・研修体制の構築が必要不可欠となります。また、働き方改革の視点から、各職種が本来の業務に集中できるためのタスクシフト・タスクシェアを推進し、能動的に業務に対応できる仕組みを整えることが重要となります。これらの背景を踏まえ、メディカルスタッフの意識啓発やスキルアップに資する事業展開に努めていきたいと考えております。また将来的には、専従職員の配置や、総合臨床研修センター、スキルアップセンターとの統合をもって、機能強化と事業規模拡大を図っていく必要があると考えております。皆様の更なるご理解とご支援を賜りたくお願い申し上げます。

(メディカルスタッフ教育研修センター長 新岡文典)

がんゲノム医療拠点病院に指定

本年9月19日に、本院は厚生労働省より「がんゲノム医療拠点病院」に指定されました(全国34施設)。これまで、本院はがんゲノム中核拠点病院の東北大学病院の連携病院として協力体制のもとで実働してきました。これからは、さらなるがんゲノム医療の充実に向け、自施設で遺伝子パネル検査を完結できる医療機関となります。がんゲノム医療は、これまでのような疾患ごとの治療方法の選択ではなく、最先端の医療技術によっ

て、患者個々人の細胞を遺伝子レベルで分析した結果を、最も適切な治療方法に結びつける医療です。すでに各種がん関連遺伝子に対する創薬開発が進み、次々と新規薬剤が承認されてきています。今回は、がん遺伝子パネル検査により、がん関連遺伝子を網羅的に検査することになります。その結果、まず未承認薬まで含めた最適な治療薬まで結びつけることを目指します。但し、まだ走り出したばかりであり、治療薬までたどり着ける

のは10人中、1~2人程度です。治療薬候補が明らかになっても治療を受ける場が限られてしまうため、これからの医療という感じはまだぬぐえません。また、解析データの元データの解釈は難しく、様々な専門家の協議による検討(エキスパートパネル)の定期開催が必要になります。その他、遺伝子解析時の偶然の遺伝性疾患発見に対するカウンセリングや、がんゲノム情報管理センター(C-CAT)への情報入力に関する人的資源確保等々、問題は山積しています。けれども、まずは次世代医療へのスタートラインにつけたことは大変価値のあることだと思えます。これからは、このシステムを充実したものにして、患者さんに還元していく事が大事です。各専門家の協力、多職種の協力、地域の協力等々、皆様方のご協力よろしくお願い致します。

(腫瘍センターがんゲノム医療室長 佐藤 温)

弘前大学医学部附属病院へのご寄附、心より御礼申し上げます

ご氏名の掲載をご承諾いただいた方に限り、ここにご芳名を掲載させていただきます。

今号では、令和元年5月から令和元年10月末までの間にご入金を確認させていただきました方を公表させていただきます。(経理課)

寄附者ご芳名
四ツ谷 裕樹 様

【編集後記】

南塘だより第96号をお届けいたします。お忙しい中、原稿をお寄せいただきました皆様へ心より感謝申し上げます。

本号が皆様のお手元に届くころには決定していると思いますが、今年の新語・流行語大賞には、「ワンチーム」、「笑わない男」、「ジャッカル」、「4年に一度じゃない。一生に一度だ」など、ラグビーワールドカップに関連したものが数多くノミネートされました。日本代表の快進撃は、日本の「にわかファン」だけでなく、世界中のラグビーファンからも称賛されました。自分を犠牲にして仲間を生かす、これぞラグビーといったプレーは、医療にも通じるのではないのでしょうか。ただし、働き過ぎにはくれぐれもご注意ください。

(病院広報委員会委員 青木昌彦)